



# A hundred years of Phoenix Roebelenii

1 2023 (令和5) 年 2月1日

## 八丈島ロベ新聞

発行 八丈島産業祭実行委員会  
編集 南海タイムス社

## ロベ導入から100年 記念特集



### フェニックスの祭典

八丈島の花卉園芸が急成長していた1956(昭和31)年、八丈島園芸農協主催のフェニックスの祭典「熱帯植物祭」が開催された。写真は会場の中の郷小学校に展示した島の観葉植物と、同時に開催した「ミス八丈コンテスト」に出場した島の女性たち(左端は初代のミス八丈)。島空前の祭典絵巻といわれ、八丈園芸のめざましい発展ぶりを全国にアピールする催しとなつた。



▲「横浜植木物語」(2021年刊)

横浜植木の創立130周年を記念して誠文堂新光社から出版された『横浜植木物語』(写真左)によると、ロベは明治の末期までローベン氏の専売品になっていた。同書には、八丈島で行われたロベの試験栽培の結果や、結実の方法なども記されている。八丈島でロベ栽培の方法が確立したのは昭和に入つてからのことだった。

### 平和の産物

園芸は農業の一分野だが、本来は「園藝」と書き、生きた植物を絶対的素材とする芸術のひとつ、と解釈されている。今、島のいたる所で見られるフェニックス・ロベレニー。導入からの100年の間には戦争があり、食べられない観賞用植物は罪悪感された。有事となれば、植物を育て、楽しむどころではなくなる。観葉植物は「平和の産物」なのである。

植物の流行は時代と共に、変わっていく。江戸時代の八丈島



コロナ禍の現代。葬儀の簡略化が進んでいるが、切葉の需要に影響しないだろうか。気候変動でロベが八丈の適地適作物でなくなる日はくるだろうか。平和は続くのだろうか…。100年の節目に、八丈島の未来に思いをめぐらしている。(編集部)

八丈島の適地適作物であり、市場のシェアを独占し続いているフェニックス・ロベレニー(略称「ロベ」)。「金の成る木」として、世代を超えて感謝されてきた植物だ。

ロベの栽培は「横浜植木株式会社」(本社・横浜市)が八丈島に雌雄2株を植え付けたのが始まり。時期は大正10年ごろ、といわれている。導入から約100年。明治時代に自生地で発見され、八丈島で栽培が始まるまでの歴史を振り返ってみよう。

野生のロベが英國サンダーランドのローベン氏によって発見され、タイのバンコクから各国に販売されたのは明治30年代。以後、歐米諸国では、最優美なヤシとして高値で売買されるようになる。『最新花卉園芸(総合園芸体系8篇)』(昭和6年刊)によると、ロベは明治の末期までローベン氏の専売品になっていた。同書には、八丈島で行われたロベの試験栽培の結果や、結実の方法なども記されている。八丈島でロベ栽培の方法が確立したのは昭和に入ってからのことだった。

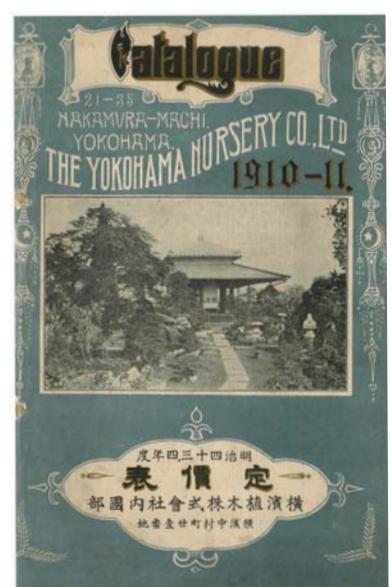
このときの調査では自生地は発見できなかつたが、高木氏はタイから多数の熱帶植物を持ち帰り、同社の輸入品目の範囲は一段と広がつた。

ロベが専売品ではなくなり、横浜植木の定価表(写真右)に初めて登場したのは、翌1910(明治43)年。価格は、「小苗が一本2円、大苗は一本15円」だった。

ロベがフランス領インドシナ(現在のベトナム、ラオス、カンボジア)の原産と判明したのは、1916(大正5)年のことだった。(2面につづく)

## 野生のロベを探せ!

## 明治43年初めて販売



▲横浜植木株式会社の明治43年度定価表(カタログ)表紙  
◆定価表には3種のフェニックスが載っている。写真はロベ



高齢農家も少なくない。返納を機に口べの出荷を止める高齢農家も少なくない。

年をとってもマイペースで生きる口べの仕事は八丈島の高齢者の暮らしを支え、健康維持にも一役買う。三根・佐藤信夫さん(88歳)、初子さん(84歳)夫妻は今も毎週口べを出荷している。

信夫さんは櫻立、初子さんは三根の出身で、ふたりは結婚後に上京、東京・板橋の大山でサンディッチ屋を営んでいた。Uターンしたのは40年ほど前。信夫さんは帰島してしばらく親戚の船に乗つて漁を手伝うなどしていたが、その後櫻立の畑を引き継ぎ、口べ農家になった。

島は雨が多い。ぬかるんだ足下で、傾斜地の畑から口べを切る作業は高齢者には厳しい。そして、何より必要なのが車。運転免許の返納を機に口べの出荷を止める高齢農家も少なくない。

年をとってもマイペースで生きる口べの仕事は八丈島の高齢者の暮らしを支え、健康維持にも一役買う。三根・佐藤信夫さん(88歳)、初子さん(84歳)夫妻は今も毎週口べを出荷している。

信夫さんは耳が遠くなったり、車の免許を返納した。それまで

は口べを切るのも自分たちでやつてきたが、今は同居する息子の忍さん(48歳)が、櫻立の畑からが頼りだ。口べを切つて運んでくれる。買ひ物や病院への送り迎えも忍さん

## 三根・佐藤信夫さん夫妻

# 口べは生きる張り合い



自宅の作業場へ持ち込まれた口べの葉は、信夫さんがトゲを取り除いた後、蛍光灯の灯りの下で二人並んで葉先の調整を行う。のんびりテレビを見たり、話をしながらの時間は楽しく過ぎる。「最近は目が見にくくなって大変です」と信夫さん。

八丈島にフェニックス・ロベレニーを導入し、農場を開設した。その農場に勤務し、園芸技術を学んだ島民の中から園芸の先駆者が2人誕生する。

中之郷に約5畳の畑を借り、農場を開設した。その農場に勤務し、園芸技術を学んだ島民の中から園芸の先駆者が2人誕生する。

う回想している。

横浜植木が導入した2株の口べは、中之郷・山下清吉村長宅に植えつけられ翌年実をつけた。

横浜植木が植えつけた口べは成木で、すぐ

う。「横浜植木が植えつけた口べは成木で、すぐ

イムス記事「口べに魅せ

られた富一郎さんは

紹介された富一郎さんは

が濃くなると、花を引き

抜かれたり、「國賊め」と

# 口べは小笠原で増産

年、「八丈島ガーデン」を創立、球根や苗の栽培を始めた。口べの種子を何十万と小笠原から持ち帰り、苗を育てたとい

う。「横浜植木が植えつけた口べは成木で、すぐ

イムス記事「口べに魅せられた富一郎さんは

紹介された富一郎さんは

が濃くなると、花を引き

抜かれたり、「國賊め」と

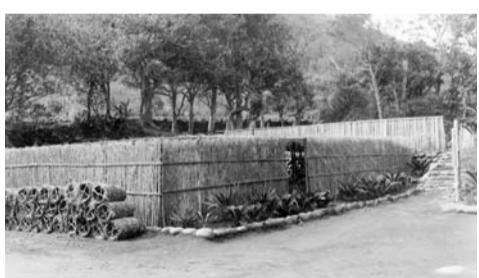
口べを売り、再出発した。

## 戦時中 引き抜かれ…

1930(昭和5)年に岐阜県から八丈島に移住し、印刷所も移転して「南海タームズ」のほか「八丈島園芸新聞」を発行していた吉田貴三さんは昭和11年に小笠原から口べの種を購入、栽培を始めた。写真は、鉢上に載った口べのヨシズ張り鉢仕立場(昭和16年に撮影)。

昭和11年に東京の温室村(世田谷)にある森田農園で口べが多く作られているのを見て、露地栽培が可能な経費がかからないことに着目して同15年、「八丈島園芸組合」を設立、その普及に力を入れた。が、翌年開戦。1町歩余りの畑や施設内にあった口べなどの園芸植物は引き抜かれた。終戦後の

同21年、吉田さんは八丈島園芸組合の組合長として組合員に対し、軍が戦争中に組合員が培養していた植物に与えた損害を組合に報告してほしいとの「告知」を同年7月13日付けの南海タームズに掲載している。



## S.33年 観葉植物の手引書 島の園芸家ら執筆



1958(昭和33)年、『観葉植物 -作り方の手引-』(誠文堂新光社刊)が、「八丈島園芸農業協同組合」「農耕と園芸編集部」の共同編集で発行された。グラビアのキャプションには、「八丈島はヤシの島、熱帯植物の島として時代の脚光をあびている。その種類は600種を超え、苗は全国の営業家に送られている」「島の空地という空地は、フェニックス・ロベレニーでうずまっている」とある。

島の園芸家18人が、バナナ、マンゴー、パイナップルのほか、アンスリウム、カラジウム、サンセベリア、シダ類、ストレリチア、ブーゲンビリアなどの品種紹介や作り方の手引きを執筆している。園芸先進地・八丈島を記録した1冊だ。

## 千万長者いつぱいの島

### 八丈島にフェニックス・ブーム

「スーーヤシに似た緑の葉が  
げなこの熱帯植物は鳥も  
大きさ當をもたらした。  
原本がこの島に入ったのは  
戦争中の食糧増産のかけ  
片隅に追いやられ、頗るみる  
たがここ十年、ビルブルーム  
資本はなくともやれる範囲でともかく、  
八丈島は東京の南約二百九十九キロ。船で



▲1951(昭和26)年発行の『サンデー毎日』の誌面と表紙

## S.26年 戦後まもなく 口べ・ブームが話題に

# ロベ 100 年の歴史 since 1921~

- 1921 大正10 ○横浜植木株式会社は、鉄砲百合系のシネンシスを培養するため、大正8年に中之郷の畠約5haを借り受けて農場を開設し、ロベの培養も行う（同社農場は、シネンシスにモザイク病が蔓延したため、大正15年に閉鎖する）。
- 1928 昭和3 ○中之郷・山下甲太郎氏は、小笠原からロベ苗を導入する。同年、「八丈島ガーデン」を創立した福田富一郎氏は球根類の培養から着手、小笠原からロベの種子を入手して栽培する。
- 1937 昭和12 ○月刊「八丈島園芸新聞」が創刊され、島外の園芸界に向けて、八丈島特産の園芸植物の宣伝・販売活動を始める。
- 1940 昭和15 ○山下甲太郎、福田富一郎、大澤政蔵の3氏は、ロベ苗2600本を中之郷の各家庭に10本ずつ配布する。  
○「八丈島園芸組合」が設立される。
- 1941 昭和16 ○12月、開戦。駐屯していた軍は食糧増産の名のもと、青年団を組織してロベを引き抜いて焼くよう命令する。
- 1943 昭和18 ○中之郷で「園芸組合」が誕生する。  
○「八丈島園芸新聞」が廃刊。

## こぼれ話

### 10粒植え 7本発芽

「ロベ 100 年の歴史」は、大正 10 年、横浜植木の鈴木浜吉社長がタイから高さ 60cm ほどの雌雄 2 株のロベを持ち帰り、八丈島に植えたとする同社の『100 年史』や、櫻立・磯崎八助氏の著書『八丈の湯と絹と踊』の記録をもとに作成したが、導入時期は大正 5 年との記録もいくつか残る。横浜植木のロベの親株を積んだ船が小笠原へ向けて航行中、時化にあい、八丈島に寄港して雌雄 2 株が降ろされたという『日本花卉新聞』の寄稿文（京都大学・瀬川弥太郎氏）や、研究論文（東京農大・増井好男氏）があるほか、山下甲太郎氏も、山下清吉村長の雌雄 2 株のロベは、横浜植木の社長が大正 5 年に南洋航路の船から降ろしたもの、と語っている。



中之郷では、山下村長がロベの種子 10 粒を同村の大澤政蔵氏=写真=に播かせ、そのうち 7 本が発芽したという話が伝わっており、これが八丈島でのロベ栽培の始まり、といわれている。政蔵氏は染物業を営むかたわら、早くから酪農を始めるなど産業振興の功労者。中之郷小学校で教鞭をとったこともあり、山下村長は教え子のひとりだったという。

- 1947 昭和22 ○「精香園」など貸鉢業者がロベを買い付けに来る。  
1948 昭和23 ○貸鉢業大手の「東光園」が来島。ロベの出荷が本格化する。  
○8月、「八丈島園芸農業協同組合」が創立総会を開く。
- 1949 昭和24 ○1月、「八丈島園芸農業協同組合」が正式に認可される。  
○2月、「八丈島園芸新聞」が再刊する。  
○この年、ロベの1尺物は 10 株 3000 円の高値で販売された。翌 25 年の国家公務員の初任給は 4223 円。
- 1950 昭和25 ○町の花卉園芸栽培面積の調査で、ビニールハウスが初めて対象となり、2,560m<sup>2</sup>と集計される（以後、ビニールハウスは毎年増え続け、昭和 45 年には 384,600m<sup>2</sup>に拡大する）。
- 1952 昭和27 ○園芸農協など 3 団体は千葉大、京都大、岡山大などの教授ら学会の権威者を招き、栽培技術の習得、研究試作を進める。  
○末吉村婦人会がロベの 2 年生苗を 1000 本購入し、全会員に 10 本ずつ配布する。
- 1953 昭和28 ○町の花卉園芸販売統計に切葉切花（1800 万円）が初めて集計の対象となり、基幹作目としての位置づけを確立する。
- 1956 昭和31 ○8月、八丈島の園芸を全国に宣伝しようと、園芸農協主催の「熱帯植物祭（フェニックスの祭典）」が開かれる。初の「ミス八丈コンテスト」の開催や航空会社による遊覧飛行など、一大イベントとなる。



◆1955年のミスユニバース世界大会で5位に入賞した日本代表の高橋敬緒子さんが、ミス八丈コンテストの審査員として来島した（写真は出迎えの八丈島空港）

- 1957 昭和32 ○八丈島の熱帯植物と球根類の栽培状況を視察するため、全国花卉業界の 271 人が来島する。  
1958 昭和33 ○ロベの生産数量が 503 万本、販売数量 24 万本、販売金額は 3300 万円に（『八丈島概況』）。

- 1971 昭和46 ○花卉園芸の露地栽培の面積が 358ha と、22 年間で 20 倍に拡大する。
- 1976 昭和51 ○中之郷・奥山高良氏宅の雌雄 2 株のロベが、導入の原木として八丈町天然記念物に指定される（この原木は山下清吉村長が昭和 27 年、甥の高良氏宅に移植したもの）。
- 1978 昭和53 ○大型貨客船「すとれちあ丸」が就航し、コンテナによる切葉出荷が大幅に改善。急送便が確立される。
- 1983 昭和58 ○八丈島ロベ祭実行委員会が「ロベ祭り」を開催。産地形成に功績があった 9 業者 10 氏に感謝状を贈る。中之郷の新堤近くに「ロベ感謝の碑」を建立、導入の原木も移植した。
- 1987 昭和62 ○切葉の安定出荷、出荷規格作成をめざす「八丈島ロベ共撰共販出荷組合」が発足する。組合員は 33 人。
- 1990 平成2 ○共選共販によるロベ切葉を初めてオランダに輸出。



▲91年4月28日付南海タイムス

- 1991 平成3 ○ロベ鉢物をオランダへ輸出する。  
○1991 年の花き園芸の生産高が 26.7 億円となる。このうちロベは切葉が 13.7 億円（単価 19.2 円）、鉢物が 3.4 億円（花き生産出荷実績調査）。
- 1992 平成4 ○オランダで開催された「国際園芸博覧会・フロリアード'92」に出展したロベが 1 等賞を受賞する。
- 1993 平成5 ○ロベ切葉の出荷額が共撰共販、個撰合わせて過去最高の 15 億円を超える。以後、生産高は減少していく。  
○東京都の単独事業で「フェニックス養成施設」（ラスハウス）が整備される。
- 1998 平成10 ○全国 217 市場のロベに関する市場動向調査が実施され、八丈島の市場占有率が 90% を超える。
- 2015 平成27 ○2 月に「八丈島観葉植物トレードフェア」が開催。市場関係者が多数来島し、生産者との取引が活発に行われる。
- 2017 平成29 ○ロベ共撰共販出荷組合が 30 周年。組合員は 273 人。



## こぼれ話

### 「船便待てない」航空農協が設立

### 定期航空路開設前 自家用機を購入

「5 日間に 1 便しかない船便は待ちきれない」と、1954（昭和 29）年、「八丈島航空輸送農業協同組合」が設立され、八丈島特産の観賞用植物の空輸が始まる。その様子を、『南の島に花の飛行機』の見出しで、毎日新聞（昭和 30 年 3 月 27 日付）が大きく紹介した=写真。

出資金は 500 万円。借入金などと合わせ 1300 万円で米国パイパー製のトライ・ペイサー単発機（4 人乗）を借り入れ、同年 10 月には同社製の双発機（6 人乗）を購入する計画のもと、単発機を月 20 回、双発機を月 36 回運航する目標をかけた。日本最初の自家用飛行機だったという。小宮山源一組合長は「本島の開拓史を飾る記念日」と創立総会で述べた。

昭和 30 年 4 月からは東京～八丈島間に定期航空路が開設される。日本ヘリコプター輸送㈱の双発ダブ機（8 人乗）が就航し、夏には同社のヘロン機（14 人乗）が毎日運航した。同年 3 月から運航を始めた八丈島航空農協のトライ・ペイサー機は、6 月、日本青年飛行連盟がチャーターして広島から藤沢へ向けて飛行中、伊豆半島の山中で墜落、大破した。八丈島航空農協はその後、事業を停止する。

【三】 第八舟號

八丈島口べ新聞 新聞発行日一月二十日五十和譜 (第一回)

八重咲は往々土地に依つて一重と退化することがある、純白の花が稍黄味を帶び半八重になつて三

## 観葉植物の育て方 (一)

ケンチャニツクス

兩者とも観葉植物中で、緑葉の王者であります。

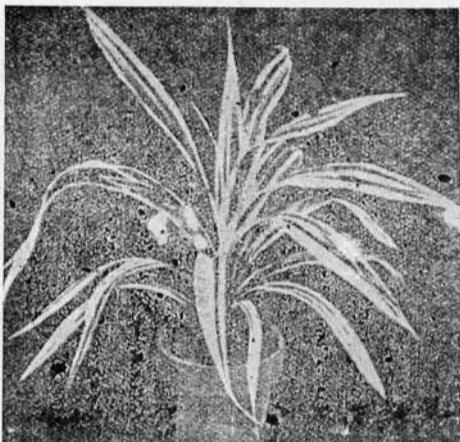
白亜の洋館の美しいシャンデリアの下に又は派出やかなダンスホールのカーテンの傍らに、此等の一鉢二鉢が如何に雄麗な感じがあるものかを御覽下さい。温室内の裝飾用にも、御客間の窓際飾り入が、妻の一つの立派な仕事として取り扱はれて居る位一般的のものであります。手入れと云つて一番大切なのは、毎日其の葉を海綿か軟かい布片

八重咲は往々土地に依つて一重と退化することがある、純白の花が稍黄味を帶び半八重になつて三

四年後に一重に成る、是非年々本場産の良球を手に入れるやう御勧めしたいのである。

## 観葉植物大投賣

- アレカルーテセンス  
二尺苗 十株 一圓八十錢 百株 十五圓
- フエニツクスロベレニー  
一尺苗 十株 一圓八十錢 百株 十五圓
- バンダナス  
大苗 十株 一圓五十錢
- ハマユウ  
一名電信草とも云ふ 一株 六十錢
- モンステラ  
印度産の大形 一株 一圓四十錢
- 青葉ゴム  
大谷渡り 一株 一圓六十錢
- 大モントモリラン  
赤葉 ドラセナ  
コウモリラン  
八十五十錢



(モンステラ)



(アレンガイングレー)

## 知略【二】

夏の花として外人間の人氣は異常なものがある。

す大球なれば花は百パー セント開花するものである、いかに早植しても石

自首玉、大百球入りの中

七が全部開花

も一箱二、

選ぶ可きで

して余り夏

力が好く、粘

質の土地が好

購入するに當

可きは必ず本

産の良球を

直接栽培者

の間違

人は内地産の

直接栽培者

の間違

は翌年再び切

て賣る者もあ

一度切花を取

る。之は一寸

であるが、短

い、一球の價が

比して安價な

限りで球根を

並派に採算が取

である。

○カメロップスエキセルサ  
十株 一圓 百株 六圓

○サバルハバネンシス  
一株 八十錢 十株 七圓

○ブリツチヤディヤ  
一株 八十錢 十株 七圓

○アレンガイングレー  
十株 一圓 百株 六圓

○リビシストニヤシネンシス  
十株 一圓 百株 六圓

○コ、スウエデリアナ  
一株 一圓 百株 八圓

○オレオノドキサレギアナ  
十株 一圓 百株 八圓

○ケンチャマツクアスリー  
十株 一圓 百株 八圓

○カリオタソボリフエア  
十株 一圓 百株 八圓

## 新ヤシ科植物發賣

(サバルハバネンシス)



1937-1943

昭和12~18年

## 記録された園芸史



行發日一回一月  
錢銀〇六年ケ二  
料讀購  
(品止停格價)  
三貫田吉  
鶴賀大島八下府京東  
社スムイタ海南社會式株  
第9二直次八  
第426五三京東替振

## 特產品 島外に新聞でPR

「八丈島園藝新聞」は1937(昭和12)年に創刊、戦況が悪化した同18年まで6年間、月1回発行していた。戦後は昭和24年に再刊して同32年まで発行されている(廃刊の年月日は未確認)。発行人は、南海タイムス社社主・吉田貫三氏。吉田氏は昭和15年に「八丈島園艺組合」、同23年に「八丈島園艺農業協同組合」を設立するなど、この時期、島の園艺發展に力を注いだ。島内外の園艺関係者に向けて発信した園艺新聞もそのひとつで、紙面を通して八丈島特産のヤシ類、観葉植物を広く全国の園芸家にアピール

していたほか、島内生産者に向けては、有望園芸品種の紹介や栽培技術の特集、施肥や病害虫対策などの情報も伝えている。南海タイムス社内に保存されていた同紙のバックナンバーは、すべて行方知れずとなつたため、当社では古書店や国会図書館より一部を入手した。戦前の新聞はいまのところ、昭和15年12月1日号しか入手できていないが、戦後すぐ黄金期を迎える八丈島園艺業の礎の一端を伝えている。

▶ 1940(昭和15)年12月1日発行の「八丈島園艺新聞」の2面と3面。ケンチャやフエニツクスの育て方を紹介する記事を載せている。広告欄(広告主は「八丈島ガーデン」の福田富一郎さん)には、当時、班入りタコノキやベンガルゴム、ドラセナ類など、現代の人気商品も掲載されており、「八丈島ガーデン」の福田さんの先進性がうかがえる貴重な記録だ。ヤシ類も多く栽培されていた。フエニツクス・ロベレニーは1尺苗が10株で1円80銭の売値がついている。

1949-1957

昭和24~32年

## 観葉植物は高級品

戦後、園芸の先進地として島外から熱い視線を集めている八丈島。品目別の園芸植物の値段は、戦後再刊した「八丈島園芸新聞」で確認できる。島外業者向けの値段だが、1949(昭和24)年のロベ幹丈1尺物は10株3,000円。同年の国家公務員の初任給は4,223円だから、園芸植物がいかに高級品だったかがわかる。昭和28年のロベの8寸鉢は10本5,500円、ケンチャ・フォステリアナは5寸鉢1本10,000円もした。

気候的優位にあった小笠原や沖縄が戦後、米国に占領されると、八丈島は最暖地として、「東洋のハワイ」「大自然の温室」と形容されるようになる。が、生産量が増えるにつれ高値で取り引きされていた観葉鉢物は値下がり傾向となり、代わって、輸送面で有利な切葉切花が八丈島の基幹作目になっていく。

この変化は、1950(昭和25)年から21年間にわたる花き園芸の販売状況を掲載している『八丈町産業概要』(昭和48年刊)からも確認できる。

昭和45年まで拡大を続けた鉢物の生産にかけりが出てくるのは翌年から。一方、昭和28年に統計に初登場した切葉切花類の販売額は増え続け、昭和46年には鉢物の販売額と逆転している。

## 戦後再刊

戦後の1949(昭和24)年2月に再刊した「八丈島園芸新聞」。この年はまだ日本は連合国軍総司令部(IGHQ)の占領下にあり、すべての出版物はIGHQによって検閲されていた。「再刊の辞」が述べられている1面には、検閲の日付と印「NEWS.DEPT.FILE」が押されている。園芸新聞は途中旬刊に変わっているが、廃刊を含めてその年月日は確認できない。

甘藍王國の實現？  
生産額七千万圓を目標  
使用種子量實に七斗一升

記録破りの麥增收  
著しい躍進の大賀郷  
農家の知性と腕が物語る農産物増収の検査台  
支那主催七重喜農業共進会の審査が開始され特選の成績が発表された結果は昨年に比べて何れも豊かな実績を示し昨年の新着種立しての努力の結論でござりますが金般的に普及されれば世界に於ける農業の前途が見えてます。

## 昭和20年代は農業王国

▲戦後の園芸新聞を見ると、昭和20年代の八丈島は農業王国だった。大量の農産物が島外へ出荷され、蔬菜、牛乳は島内で自給していた。1949(昭和24)年7月1日付けの紙面には、「記録破りの麦增收」の見出し。「農家の知性と腕が物を言う」農産物共進会の入賞者発表記事では、反当たり収量の1等は、大麦が中之郷村・菊池規一さんの五石一九三五(=937kg)、小麦が大賀郷村・沖山晋さんの三石三四八四(=604kg)だった。同日の紙面に、「甘藍王国の實現？ 生産額七千万円を目標」の記事もみえる。甘諸(キャベツ)やレタス、セロリーの大量生産は実現し、八丈島は昭和27年、政府指定の蔬菜特産地になる。

ネックとなったのは、輸送面のハンディ。加えて、安価なビニールハウスが全国で普及すると、地の利を生かした蔬菜類の端境期出荷のメリットが失われる。その後の離島ブームで観光業が盛んになり、八丈島の産業は大きく変貌していく。

## 昭和30年代に急成長

本島の椰子栽培の歴史、つまりこれが本島の花卉文献(博物学年表)によると「寛政三年四月(一七九年、一六六年前)田村元長、鈴木素行幕命ヲ奉じテ伊豆諸島ヲ巡航シ、薬草ヲ採集シ、桙椰子(ビロウニ該当スル)一株ヲ八丈島ニ植シ八月卅日江戸ニ歸ル」と記している。このビロウに該当すると思われる最古のものが大里に亭々そびえている。そして第二陣として横濱植木株式会社が本島の特殊な亞熱帶的気候に着目し、フェニック

得するに至った。本島に花卉園芸を導入し、島民に刺栽を興え、目覺めさせた功績は同社に負うと文献から1791(寛政3)年にビロウが植樹された記録を発掘し、八丈島園芸の草分け、と紹介している。その最古のビロウは、記事によると昭和32年当時も大里にそびえていた。この特集では、ビロウにつづく第一陣は、1916(大正5)年の横濱植木会社によるロベの導入、とある。

## ビロウは江戸時代に

ス、その他観葉植物等をつまみこれが本島の花卉園芸の草分けであるが、當時移植した雌雄のフェニックス、ロベリーニーが大正五年本島に植付けた現在中之郷郵便局脇の奥山高良氏宅の庭にあり、樹高約一丈五尺に達し、斯業の発展と共に繁茂している。以来同社は、中之郷に出張所を設け、次々と園芸植物を導入し、栽培管理をなさせたのであるが、次第に島民も自覺し、自ら栽培技術を習得するに至った。本島に

栽培面積ご移出高

種類	28年		29年		30年		31年	
	栽培面積	販賣金額	栽培面積	販賣金額	栽培面積	販賣金額	栽培面積	販賣金額
観葉植物類		7,000,000	155.0	12,150,000	194.3	19,850,000	220.3	38,787,000
球根類	6,189,600		187.2	12,904,000	191.8	17,359,000	188.6	21,059,500
種苗類	950,000		9.0	800,000	13.5	1,400,000	16.2	2,100,000
切葉切花類	4,500,000		18,000,000		23,000,000		27,500,000	
計	18,639,600		43,854,000		61,609,000		89,446,500	

▲花卉園芸の栽培面積と移出高の推移も掲載されている。1928(昭和28)年に移出高が700万円だった観葉植物類は、昭和31年に3800万円余、450万円だった切葉切花類も2750万円と、それぞれ3年で5倍以上に伸びている(ちなみに、『八丈町産業概要』によると、昭和45年の販売額は観葉植物類が3億8460万円、切葉切花類は2億円超に)。



# 八丈島・フェニックスロベレーー 100年を思う 「ロベ生産減＝お取引先・需要の減」



浅沼 建夫さん

株式会社 大田花き  
営業本部執行役営業本部長

1921年に雌雄一対のフェニックスロベレーー株が八丈島に導入され、100年（正確には101年）が経ちました。私は八丈島で生まれ育ちましたが、生活の一部常にロベの存在がありました。実家は切葉生産者で、周りから「お前はロベのおかげで大きくなれた」とよく声をかけられました。ロベは八丈島の生活なくてはならない存在と言っても言い過ぎではないでしょう。

私は縁あって、大田市場花き部・株式会社大田花きに勤務しておりました。業界に身を置き、改めてロベの存在価値を認識しました。ブーケや装飾のデザイン、特にメインの花材はその時代のトレンドで変化していくますが、主役の花を引き立てる葉物は必要不可欠なもので、その代表的な品種の一つ、また観葉植物・鉢物としての商品地位を確保しているのが「フェニックス・ロベレーニー」です。

**コロナ禍の花卉業界**  
2020年、新型コロナウイルスの感染拡大は、さまざまな業界に大きな影響を与えるました。花卉業界においても、小売店舗の休業、時間短縮の延期や中止・規模縮小の流れとなり、花卉類

生産者との間で大きな競争となり、生産者を取り巻く環境はより厳しくなっています。八丈島産ロベの国内市場シェアは100%に近いですが、その生産量も減少傾向で推移しています。



大田花き市場に届いた八丈島のロベの箱。これからセリにかけられる

の販売に負の影響が出ました。生産者から小売店（消費者を含め）までが厳しい状況になったのは記憶に新しいところです。

このような中、花卉業界には「光」もありました。コロナ禍における「リモートワーク」や「外出自粛」で、いわゆる「おうち時間」が増加。自宅でガーデニングや鉢物、小さなブーケを飾って楽しむ人蔵の需要の拡大により、花材業界は復活したとしました。

その一方、国内の切花生産量は1996年の約57・6億本をピークに、2021年は32・5億本と半減。現状も花卉の生産減は進んでいます。

ロベに限った話ではあります。それを意識しつつ、思いつつまますか、私は定（数量減）により安定化（仕入れができない）に

団結を明確にし改善 それらの因果律を天小問わず明確にする。それに対しても改善策を立てる。そして実行。その結果をチェック、さらに改善する。このサイクルを回し続けていくことが必要です。われわれ市場も同様の意識を持って仕事をしております。八丈島だから、ロベの生産者だからといふ区分けではありません。

お取引先（消費者まで含めて）に喜んでいただこうことが最終目標です。その結果として対価をいりません。

浅沼さんは07年以来の共撰共販による出荷数量、売上額、単価を詳細に分析。その結果、出荷量は600万枚／900万枚台で推移するが、ピークの16年の954万枚が、21年は741万枚となりました。

平均単価は現在が約23円で、16年前の約19円より高い。売上高は17年以降平均で1億6800万円。16年前の平均と比較して約400万円減少した。浅沼さんは「単純に全体の出荷量が減少しきい」と分析した。

島内にも分業スタイルを取り入れている生産グループや、高齢になって手が回らなくなってしまった畑の共同管理にまで拡大している。組合員の一人は「最初は共撰共販体制を一部作業の分業化や、畑の共同管理にまで拡大しているから」と、変化を受け入れたがらない。切り葉は個々の農家にいる。ただ、畑全体の出荷量が少なくなると、生産者個々の危機感は希薄になつて手が回らなくなつた畑の消毒作業や葉先の調整を知り合いに頼む生産者はいる。ただ、島全体の出荷量が少なくなると、市場価格が維持される側面もあります。組合員の一人は「最初は共撰共販の集荷は毎週月、水、土曜日の3日間。農協本店の集荷場には、朝早くから会員が結束したロベを持ち寄る。職員によって規格等級の選別が行われた後、箱詰めされ、翌日の貨客船で輸送。各市場へ出荷される

らないといった現状があります。そのような方々に寄り添い、土地の有効活用につなげていくことが必要です。

上記の内容や新規就農への取り組みなどは、行政やJAの皆さんも既に実行していると思います。ただ、良い仕組みや制度を作つても、使ってもらわなければ効果はありません。農家に寄り添い、理解していただき活用させていくための「孝動」が必要と考えます。

## 稼げるときに出荷できない



2022年11月11日、三根公民館で開かれた研修会。14日の末吉会場と合わせ約60人が出席した

### ロベ共撰共販出荷組合研修会で提案

## 集落営農の可能性は



研修会でロベの規格について説明する浅沼晃輔さん

### 「今は売れているから」生産者の危機感は希薄

#### 共撰共販の拡大から

島内にも分業スタイルを取り入れている生産グループや、高齢になって手が回らなくなつた畑の共同管理にまで拡大している。組合員の一人は「最初は共撰共販の集荷は毎週月、水、土曜日の3日間。農協本店の集荷場には、朝早くから会員が結束したロベを持ち寄る。職員によって規格等級の選別が行われた後、箱詰めされ、翌日の貨客船で輸送。各市場へ出荷される

組織する営農組合などだ。集落営農は目標指向性によつて①経営発展型②地域貢献型の2つに分類できる。経営発展型は、「効率的、計画的な土地利用」「規模拡大」「複合化・多角化」など企業的な営農を行う。

一方で地域貢献型は、「農地の維持、地域経済の維持（女性・高齢者の生きがいや所得確保）」「生活の維持（生活支援、福祉、環境保全など）」「人材維持（Uターン、リターンを含む）」などが主な目的。「若者を取り込みながら集落内の交流」「地域資源を活用した付加価値の創出」「集落内のコミュニケーションを深め、地域の人々に生きがいを与える」など、第一に地域活性化の原動力となることを目指す。



共撰共販の集荷は毎週月、水、土曜日の3日間。農協本店の集荷場には、朝早くから会員が結束したロベを持ち寄る。職員によって規格等級の選別が行われた後、箱詰めされ、翌日の貨客船で輸送。各市場へ出荷される

八丈島への導入から100年。長年、島の園芸を支え、また、現在も八丈島産が国内シェアの9割を占めるとされる代表的基幹作物であるロベ。生産開始から1世紀の節目を迎えた今、ピーカ時に切り葉だけで15億円を超えた生産額は、半分程度にまで減少した。国内需要の低迷や生産者の減少・高齢化による生産量減少がその要因だ。「ロベ100周年」の企画で2021年10月、農協の呼びかけで5人の若手生産者による対談が行われた。ロベの生産現場の課題や未来への展望が語られた。

### 進む葬儀の簡素化

対談が行われた時期はまだコロナ禍の最中。コロナによる「喪ごもり需要」で園芸産業はかつてない活況を呈したとされるが、ロベ切り葉に関してもそれほど恩恵はなか

# どうしたらつなげる 未来へのバトン

20年は774万枚。個撰と合わせても生産量は減少している。現在共撰共販の会員は260人ほどいるが、コンスタンントに出荷しているのほかのうち100人ほどだ。

「脚が悪くて畑に行け

居場所がある「20年間で島の人口が3千人減った。農業者やロベの生産者が減るのは当たり前の島民だけでは無理で、農業をやる移住者を増やすこと」「生産量減少はある意味で新規参入のチャン



大賀郷・西見の村口知功さんのロベ鉢物ネットハウス。6・7月に鉢上げした約1200本を翌年の春先から夏前までにすべて売り切る。コロナ禍では観葉植物も人気になった。「回転は早くなったが、値段は上がらなかった。ブームはいつか去るから、その後のことを考える」。島内のロベ鉢物生産者も今では両手に届かない軒数で、切り葉同様に後継者不足は深刻だ。日々変化し、多様化する観葉植物市場で100年続いたロベが生き残していくために何ができるのか、模索は続く。

## 多様化する観葉市場 生き残りかけ…

ロベ生産者の主体はシニア層で、シニアの暮らしを支える意味では大きな役割を果たしている。ただ、産地としての将来を考えれば若い意欲的な生産者が条件のいい畠を保有するのが絶対条件「借りられる畠は傾斜地が多い。自分も年をとると切れなくなるなど思ふ」と手が出せない」。先祖代々の畠を所有するお年寄りは、「いかか子どもが島に帰つて相続してほしいと思っているが、ほとんどの場合、子どもは島に帰る気はなく、畠は荒れていく」。何か方策を考えるべきだ」。

葬儀の簡素化が進み、一時は市場から出荷制限がかかった。10年後には祭壇がバーチャルになるのではないか、そもそも口

べの切り葉をネットで買う人はいない」など、要素はなかった。共撰共販の出荷数量は2010年は926万枚だったのに對して、20

2020年は2000円もちらつかないが、竹が生えているよは減ったが、ロベのシェアはほぼ八丈が占めている。今のところ市場にも

道路沿いの畠を見ても農業者からは「いい畠が借りられない」との声を聞く。後継者がいないという一方、農地の流動化は思うように進まない。

「現状、一緒にやれるのは夫婦、家族の単位まで。他人同士では売り上げの営は島では可能か。

こうした現状を開拓する一つの方法が企業的農業への移行だ。農地を集積し、作業を分担するなどした新しい形の農業経営は島では可能か。

企業的農業に活路

トレスのある職場で働く

よい。試行的にでも

やめてみるべきだ

「母親

が子育てをしながら黄八丈を織ったように、空い時間に内職でロベの調整などの仕事ができれば助かる。分業体制があるといい」。

企業的農

業経営については期待す

る声も少なくない。

人は意外と少ない。

### 新規就農者を誘致

八丈島で新規就農を目指す移住者は増えている

が、作物に「ロベ」を選ぶ人は意外と少ない。

「扱い手研修センター

はルスカス、レザー、八丈フルーツレモンなどの施設経営作物が主体。ロベは一定の収入を得るために時間がかかるので、参入しにくく」。

ロベ農家がどれだけ稼げるかの情報も見えない。農地の斡旋はも

りなく「ロベ

をやる」という気にならぬかもしれない」。

小さな時に体験すれば

ロベの切り葉の作業を見

るような機会は少ない。

ターンするときには『ロベ

をやる』といふ気になるかも知れない」。

### 八丈町扱い手研修センター

## ルスカスなど施設園芸が人氣

### 島外からの就農希望者受け入れ

2008年4月に開校した八丈町農業扱い手育成研修センター。22年4月に入所した7期生2人を含め、これまでに18人が研修を受けた。島外からの就農希望者に人気が高く、島の農業後継者を育てる拠点となっている。

同センターは現在、西見に面積100坪のハウス16棟と付帯施設の管理棟と倉庫。南原にハウス14棟と管理棟1棟。さらに三根、大賀郷の2カ所にロベ圃場（ネットハウス）を保有する。

研修期間の基本は4年間。研修生は島の先輩農業者から対象作物（現在はロベ、レザーフルスカス、八丈フルーツレモンの4品種）の栽培技術や農業経営のノウハウを学ぶ。研修期間中に自分に合った作物を決め、補助や融資を活用して農地取得やハウス整備をすることが可能だ。

研修生の就農作物（複数選択も含めて）で最も人気が高いのがルスカスで11人。続いてレモン5人、レザーフルスカス4人。ほかにロベ、観葉植物、サカキが各1人だ。ルスカス、

に異色の農業形態があることを宣伝すれば、興味を持って島に来る人はいる。「町、農協、農業委員会それぞれにやれることはある。どうしたらこの産業を残せるか、100年の節目に考えて、行動してほしい」。

のブランド化をどう図るについても行政の責任

に異色の農業形態があることを宣伝すれば、興味を持つて島に来る人はいる。「町、農協、農業委員会それぞれにやれることはある。どうしたらこの産業を残せるか、100年の節目に考えて、行動してほしい」。

のブランド化をどう図るについても行政の責任

に異色の農業形態があることを宣伝すれば、興味を持つて島に来る人はいる。「町、農協、農業委員会それぞれにやれることはある。どうしたらこの産業を残せるか、100年の節目に考えて、行動してほしい」。

のブランド化をどう図るについても行政の責任



淡いグリーンの新芽が伸びてきたルスカス。2022年11月下旬、西見の研修ハウスで